"重厚長大"型産業とともにあった街
――鶴見区・本町通商店街――

優良商店街として表彰も

京浜急行の京浜鶴見駅を降りて、地図をたよりに南東の方角に5、6分歩くと、間もなく第一京浜国道、続いて鶴見川にぶつかる。そこにかかる「潮見橋」をわたった対岸のまちが、本町通りである。

橋のたもとには、釣り船が3隻つながれ、橋から数百m離れた川の中央では、しゅんせつ船が黒々とした泥のかたまりをすくいあげていた。

橋をわたりきるとすぐ、「本町通商店街」と書かれた洒落たアーケードが目に飛びこむ。そのアーケードの入り口にたってみると、商店街が500メートルにわたって、ほぼ一直線にとおりぬけていることがわかる。

アーケードだけでなく、すずらん灯、ネオンアーチなどの設備にも工夫が凝らされている。かつて、優良商店街やモデル組合として、何度となく県や市の表彰をうけた頃をほうふつとさせる光景である。通りの半ばを少しすぎたところに、商店街の繁栄を祈願する「本町観音」が祭られている。

衰退の道をあゆむ

しかしながら、商店街を歩いてみてまず最初にうけた印象は、はなやかなつくりとは裏腹に、人通りの少ないことであった。土曜の午後であることが、その印象をいっそうつのらせた。それは、降りたった京浜鶴見駅前にある「鶴見銀座商店街」とは、対照的な光景であった。また、一見はなやかに見える施設も、老朽化が進み、かなり傷んでいる。

ターミナル駅の前にある商店街と、かつては人通りが絶えなかったとはいえ、駅からはなれて立地している商店街。歩く人の数を比べること自体、無理な話かもしれない。しかし、それを割り引いて考えても、人通りの少なさは意外なほどであった。

事実、このかいわいにもう40年以上住むという老人に話を聞いてみても、

「さびれたねえ確かに、この商店街は…。昔は、こんなことなかったんだがね…。土曜の夕方なんてのは人の肩にぶつからなければ歩けなかったもんだよ。そうさなあ、鶴見はこのあたりでも下町だから、その下町の飾りっけのない賑やかさがあったんだが、今は見る影もないわな…」

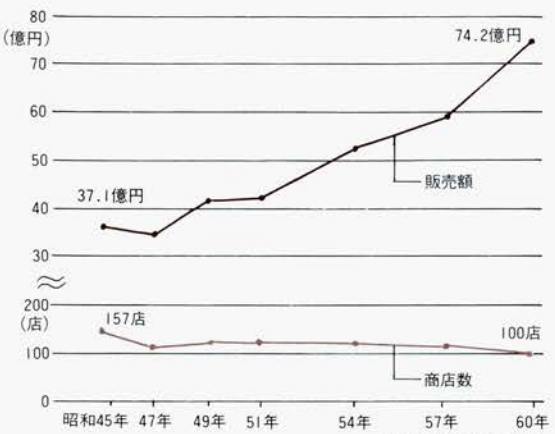
という言葉がかえってきた。

今では、土曜日の雑踏も、商店街としてのはなやかな実績も過去のものとなった。しかし、それだけにとどまらず、激しい衰退が叫ばれるようになって久しいとも言う。

では、いったい、なぜこのような状態になったのであろうか。それにはまず、鶴見区内全体の商店街の歴史を見てみなければならないだろう。

賑やかだった頃の本町通商店街

■本町通商店街商店数及び商品販売額(小売業)



横浜市「横浜市の商業」

Town

戦後の復興期から石油ショックまで

鶴見区内の商店街は、昭和20年の大空襲によって、そのほとんどが壊滅してしまった。そして、終戦。人びとは食料品や生活必需品をあつかう〝闇市〟へ殺到した。しかし、世の中が落ちつき、人びとの生活にもようやく余裕が出始めるにつれ、戦前の商店街も復興を始めた。

その流れにいち早くのったのが、直接戦災をこうむることのなかった、本町通商店街である。ほかの商店街も復興するなかで、昭和26年に協同組合を設立(復活)し、活性化をはかったのである。

それが功をそうし、昭和30年代から40年代初めにかけて、着実に発展を続けた。

だが、こうした本町通商店街の発展は、その背後に広がる京浜工業地帯の存在を抜きにして、語ることはできない。

本町通商店街をすぎて、そのまま500mほど歩くと、やがて首都高速道路横羽線にぶつかる。そのむこうには、かつての日本の産業そのものであった〝重厚長大〟型産業、鉄鋼・造船・電機・ガラスなどの工場群が広がっている。

京浜工業地帯は、大正2年から、民間資本によって百数十万坪にわたる埋め立てが行われ、多くの工場が誘致されたことに歴史を始める。そして、本町通商店街の前身である「潮田本町商工会」が設立されたのが大正12年であるから、まさに本町通商店街の歴史は京浜工業地帯の歴史であり、その隆盛と運命をともにしてきたと言って過言ではない。

最先端を行く近代的なアーケードが設置され、数々の表彰をうけた40年代前半に商店街は最盛期をむかえた。

ところが40年代も後半にはいると、京浜工業地帯も陰りを見せてきた。それを決定的にしたのが、48年のオイルショックである。下請けの中・小企業は倒産の憂き目にあい、人口は減少し、消費力は減退していった。同時に、本町通商店街も衰退の道をあゆみ始めたのである。それにかわって、鶴見駅周辺の商店街が台頭してくる。

おもな繁華街の商業活動調査である「横浜市の商業」によって、昭和45年と60年の商品販売額の比較をすると、本町通りが37億円から74億円と約2倍であるのに対し、駅周辺の「豊岡商店街」は49億円から116億円で約2・4倍、「鶴見銀座商店街」は21億円から74億円へと3・5倍の伸びをしめしている。

「商店街振興プラン」で巻き返しを

こうしたことに憂慮をかさねた本町通商店街組合では、昭和58年に「商店街振興プラン」を、さらに62年に「街づくり基本計画」をつくり、ふたたび活性化をはかることになった。

その内容は、施設整備については、歩道を車道側に50cm広げ植樹帯にする、アーケードを統一イメージをもつものに新しくする、歩道を明るい色調のカラー舗装にする、シンボルアーチ、ポケットパークをつくる、などとなっている。そして、その基本的考え方は、それぞれの店の変化・多様性を大切にしながら、全体として統一イメージをもたせ、集積の大きさをしめしていこうというものである。

そのための事業が、昭和63年から開始された。それは、京浜工業地帯全体が、〝重厚長大〟型産業一辺倒から、集積のメリットを生かしながら、個々の企業が新しい時代におうじて変わろうとしているのと、時期も考え方も同じようなものになっている。京浜工業地帯、そして本町通は、今まさに、新しい時代をむかえようとしている。

■京浜臨海部における最近の動向

企業等	所在地	内容
・自動車メーカー	鶴見区末広町	製造所を売却、跡地に流通施設を予定
・飼料メーカー	神奈川区新浦島町	移転のため、横浜工場を売却予定
・ビールメーカー	鶴見区生麦	工場の再編が進行中
・自動車メーカー	〃	用地を購入して、研究所を設置
・大黒町インダストリアルパーク（工業再配置団地）	鶴見区大黒町	市内の中小企業8社、協同組合2団体（元石油会社工場の一部）
・化学メーカー	〃	生産機能を一部縮小し、研究所を設置
・新浦島ハイテクビル（事業主体ーテクノウエーブ）	神奈川区新浦島町	東京の横浜進出企業約20社が入る16階建のハイテクビル

（横浜市都市計画局調べ）